

発話主体間の視点を調整する談話標識*

安 齋 有 紀

1. はじめに

フランス語の対話において、共発話者の意向を尊重する態度を示す場面では、談話標識 *si tu veux / si vous voulez* の使用がしばしば観察される。この標識についての辞書の記述を参照すると、以下のような用法が挙げられている。

〔共発話者¹ への提案に添える〕

(1) Passons à table, *si vous voulez*.

「よろしければ席につきましょう」 (ロワイヤル仏和中辞典)

〔共発話者の意向を聞く〕

(2) Je te fais du café, *si tu veux* ?

「なんなら、コーヒー入れようか？」 (白水社ラルース仏和辞典)

〔共発話者の提案に対する返答〕

(3) A : Je vous fais du café ? 「コーヒー入れましょうか？」

B : Oui, *si vous voulez*. 「じゃ、そうして」 (白水社ラルース仏和辞典)

(4) A : On va dîner en ville ce soir ? 「今夜は外で食事しない？」

B : *Si tu veux*. 「いいよ」 (Le Dico 現代フランス語辞典)

〔共発話者に合わせて言いかえる〕

(5) C'est une invention ingénieuse, même géniale, *si vous voulez*.

「それは実に巧妙な発明です、天才的と言ってもかまいませんがね」

(コンサイス仏和辞典)

〔共発話者に合わせた譲歩²〕

(6) C'est une bonne solution *si vous voulez*, mais il nous reste encore bien des

*本稿は、日本フランス語フランス文学会 2011 年度春季大会 (5 月 28 日、一橋大学) での口頭発表の内容を修正・再考したものである。また、「平成 24 年度 若手教員に対する支援」による研究成果の一部である。

¹ 例文を引用した辞書の記述では、本稿で【共発話者】と記した箇所は【相手】と記してある。

² Dictionnaire *Le Grand Robert de la langue française* にも「譲歩」の用法が挙げられている：« *Si tu veux, si vous voulez, si on veut*, s'emploie pour marquer une *concession* (par rapport à l'interlocuteur ou au lecteur) ou l'approximation. » (イタリック・太字・下線は本稿筆者による)。

problèmes.

「それは確かによい解決策と言ってよいだろうが、しかしまだ多くの問題が残っている」
(ロワイヤル仏和辞典)

例(6)については、ある事柄に対する「une bonne solution (よい解決策)」という共発話者の評価を否定はしないが(=譲歩)、自分(発話者)の視点によれば「il nous reste encore bien des problèmes (まだ多くの問題が残っている)」という別の見解が存在するというをこの標識によって共発話者に示す用法と解釈できる。

先行研究では、J. AUTHIER-REVUZ (1995) が構文別にこの標識の用法を説明している³。

(7) A : C'est incroyable ce qu'il est narcissique !

B : Si tu veux — je dirai plutôt infantile.

(7') A : C'est incroyable ce qu'il est narcissique, si tu veux.

AUTHIER-REVUZによると、(7)の応答表現の場合は発話者Aの発言(narcissiqueという評価)に対して、発話者Bは異なる意見があること(narcissiqueと言えるかもしれないが、自分はinfantileという評価を与える)をこの標識によって明確に示している(*conflit*: 対立的用法)。 (7')のように標識を発話の最後に言い添える場合、発話者Aは共発話者が自分とは別の評価を示すことを予想し、共発話者との対立を避けるための「予防線」として、「あくまでもこの表現があなたの意向に沿う限りにおいて…」という条件の下で、敢えて自分の意見として明示せず、保留の状態で自らの思考の中に留めている(*réflexif*: 内省的用法)。

用法に関する以上の説明から、標識 *si tu veux / si vous voulez* は発話者が発話の指示対象についての共発話者の視点を考慮しているという態度を示しながら、同時にその視点とは別の視点があることを、明確にあるいは仮定的立場で共発話者に示し、自らの見解を提案する役割を担っていることがわかる。では、このように発話者の二重の視点、二重の態度に関わる談話標識は、実際の対話において具体的にどのような状況で、どのように使用されているのだろうか。

³ J. AUTHIER-REVUZ (1995; p.194). AUTHIER-REVUZは、特に *si tu veux* の使用頻度について、単純に話者の癖 (tic) による多用の場合があると言及している。

そこで、本稿では標識 *si tu veux / si vous voulez* が発話のどのような場面に於いて表出するのか、自然対話資料⁴を用いて特に辞書の記述や先行研究では詳しく扱われていない音声現象の分析⁵を行い、さらに標識が表出する「周辺」に見られる言語現象の観察から、談話におけるこの標識の機能の説明を試みる。

2. 話し言葉の分析単位と音声分析の指標

話し言葉の資料を分析する場合、統辞構造の分節の指標となるのはイントネーション（ここでは、表現意図やモダリティーに応じて発話の終結部に現れる声の高さの上昇や下降といった変動、抑揚、強度などの音声現象を指す）である。本稿では、音声現象から *paragraphe intonatif*（以下、パラグラフ：*préambule* [主題+様態] と *rhème* [述部] から構成される）という話し言葉の分析単位を設定している MOREL & DANON-BOILEAU（1998）の対話理論に基づいて分析を行う。

MOREL & DANON-BOILEAU によると、音調を表す基本周波数 F0 (*Fundamental frequency* : Pitch-単位 Hz) と強度 I (*Intensity* : 単位 dB) の組み合わせを中心に、ポーズ（休止）、語末母音の長音化、躊躇（*eah*）の間隔などの音声現象の分析によって、発話および共発話者に対する発話者の態度を解釈することができる。F0（音調）は声の高さを表し（H1 : 100 Hz = 低, H2 : 200 Hz = 中, H3 : 300 Hz = 高）、F0 が上昇または高レベルを示す場合（F0+）は、共同発話行為の実行（共発話者の同意/対立などの態度を受け入れる意思がある）を示す。F0 が下降または低レベルを示す場合（F0-）は、共同発話行為の切断（発話者は共発話者の存在を考慮に入れず、自分の発話と向き合うかたちで発話を完結

⁴ 本稿ではパリ第3大学の研究グループ（SYLED-EA 2290）がインターネット上で公開している自然対話資料「*Discours sur la ville. Corpus de Français Parlé Parisien des années 2000 (CFPP 2000 : Université Sorbonne Nouvelle Paris 3)*」を使用している（公開アドレスは参考文献に掲載）。パリ市内（3, 5, 7, 11, 12, 13, 14, 18, 20区）およびパリ近郊（Ivry, Kremlin-Bicêtre, Saint-Ouen, Montreuil, Suresnes）在住者が、自分の住む街の特色、日常生活で気になる問題（住民、住宅、世代交代、移民、言語、教育、文化交流、余暇、地域産業、商業、経済、交通網など）について語っている。会話形式はインタビュー（パリ第3大学の研究員）を求めた計2~4人での座談会形式。

⁵ 分析には音声解析ソフト *Praat* を使用する。このソフトは <http://www.praat.org> より無料でダウンロード可。

させる)を示す。強度 I は話し手⁶の態度を示すもので、強度が上昇傾向 (I+) または中間値に留まっている場合 (I=) は、話し手が発言権を保持する意図を表し、反対に下降した場合 (I-) は、話し手は一旦発言を終了し、相手に発言権を譲る態度を示している。

また、音調の上昇 (F0+) + 強度の下降 (I-) の組み合わせの場合は *préambule* の終わりを示し、音調の下降 (F0-) + 強度の下降 (I-) の組み合わせの場合はパラグラフの終わりを示す。

以上の分析基準に従って本稿で使用する対話資料を観察した結果、標識 *si tu veux / si vous voulez* は統辞的に次のような 3 タイプの位置での表出が確認された：

1. 発話シークエンスの開始部 (*préambule* の前または *préambule* と *rhème* の間) (3.1.)
2. 発話と発話の中間部 (パラグラフの途中) (3.2.)
3. 発話シークエンスの終結部 (3.3.)

以下第3節で、それぞれの位置での表出例⁷を考察していく。

3. 談話標識 *si tu veux / si vous voulez* の分析

3.1. 発話シークエンスの開始部 (*preambule* の前または *preambule* と *rhème* の間) での表出

⁶ Morel & Danon-Boileau は *énonciateur* (発話者) と *locuteur* (話し手) という用語を使い分けているため、第2節の対話理論の解説部分の訳語はそれに従うものとする。

⁷ 例文に使用する記号

[発話の重複 (通常, 2行にまたがる)

§ 共発話者の参入

+ ポーズ (休止) + の数によって休止の長さの程度を示す。

:: 直前の音が伸びている。コロンの数によってその長さの程度を示す。

vi- 単語が完全に発音されないまま途切れている。

X 聞き取り不能箇所

˙ 語尾の母音が発音されていないか、非常に弱い (例: *je crois* → *j'crois*)

{数字} } } 内の秒数 (単位 centiseconde = 100 分の 1 秒: 以下 cs) の沈黙が続いている。

(D 数字) 最後に発音された母音が数字の秒数 (単位 cs) 伸びている。

なお、本稿の例文は筆者が音源を聞き直したうえで秒数や記号など必要に応じて加筆している。

- (8) (パリと地方の日常生活を比較しながら、地方に別荘を持つ (avoir une maison de campagne) のはどうかという提案に対して、自分達夫婦には祖父母が残してくれたパリ近郊の家があると話している.)

enq. : donc par exemple avoir une maison d'campagne comme ça ça se fait pas partie des projets

spk 3 : moi j'aimerais bien mais quand on voit effectivement pour entrer et sortir

spk 2 : moi j'ai la moi

spk 3 : les entretiens + faut les [moyens aussi

spk 2 : [j'ai mes grands-parents donc qui habitaient en région parisienne qui nous ont laissé leur maison donc **si vous voulez** pour nous c'est une maison de campagne §voilà§ mais à la limite bon moi j'ai pas l'temps d'y aller enfin mon mari est très pris vous imaginez

(enq.=インタビュアー：女性(年齢非公開))

(CFPP 2000, Paris 7 区, spk 2 : 49 歳女性, spk 3 : 43 歳女性)

例(8)では、別荘 (maison de campagne) を持つという主題について、まず発話者 (spk 2) には田舎 (=campagne) ではなくパリ近郊 (région parisienne) に祖父母が残した家があるという発話 (7 行目« j'ai »~8 行目« leur maison ») が提示されている。その際、rhème (« j'ai... ») が展開する前の préambule として、発話者の立場を強調し、発話に参入しようとする表現の繰り返し (5 行目 : « moi j'ai la moi ») が観察される。続いて **si vous voulez** によって開始する次の発話では、発話者の個人的視点を表す標識« pour nous » (9 行目) と rhème を導入する« c'est »によって「自分たちにとっては祖父母の家が別荘である」という発話者に固有の定義が改めて提示されている。標識 **si vous voulez** が表出する前後に観察された発話者の立場を強調する « moi j'ai la moi » や、個人的視点を明示する « pour nous » は、同時に他者の存在を前提とした問主体間のモダリティーを示すことから、標識 **si vous voulez** には発話者が発話対象についての共発話者の視点を考慮に入れているという態度を示しながら、それとは別の視点による定義を共発話者に提案・主張する用法があることがわかる。また、**si vous voulez** の直前の **donc** は、発話シークエンスの開始部に置かれる

場合、先行発話で提示された内容についての情報（7行目～8行目）を一旦集結し、共発話者の注意を再び発話主題（=maison de campagne）に集め、続く *si vous voulez* が主題の「再定義 *réinterprétation*」を導入することを共発話者に予告する機能を担っている。

音声特徴としては、「maison」（8行目）の“son”（H 2.5～3）と「campagne」（9行目）の“pa”（H 2.5）の音節で音調（F0）・強度（I）がともに上昇を示し、特に強度は高いレベルを示している（Fig. 1）。この現象は、発話者がこの語に焦点を当てていることを意味し、標識の先行発話と標識によって導入される発話において重要な情報であることを共発話者に強調していることが読み取れる。

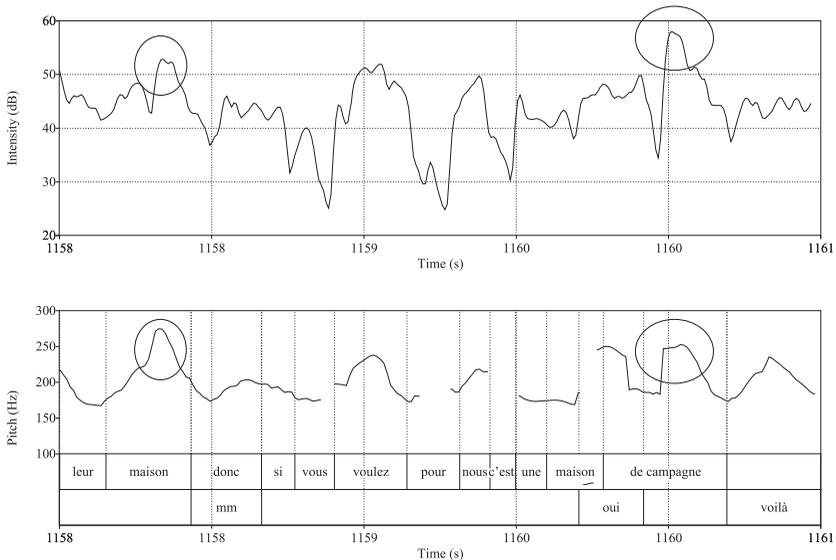


Fig.1-ex.(8) spk.2 F0 : 100-300 Hz I : 20-60 dB

- (9) (自分の住む *quartier* (界限) が話題になっていたところ、インタビュアーから「あなたにとっての「*quartier*」とは？またその境界は？*c'est quoi le quartier pour vous ? comment vous le délimiteriez ?*」と質問され、spk 3は第1のゾーン (la première zone) はアパートから数百メートルの小規模の範囲で、買い物などの用で毎日行く場所であると説明し、さらに時々行く

図書館や講座を受けている Sorbonne のある Mouffetard 界限もいわば延長ゾーン (la zone étendue) であると話を続けている.)

enq. : donc Mouffetard ça fait partie de votre zone + étendue

spk 3 : ça fait partie + de la zone é- + étendue parce que nous on y va pas tous les jours on y va + même pas toutes les semaines euh + à la bibliothèque on emprunte pour trois semaines donc on y va une fois tous les quinze jours une fois toutes les trois semaines quoi à la bibliothèque euh + euh on suit des cours à la Sorbonne alors **si vous voulez** c'est du quartier j'y vais à pied euh +

(CFPP 2000, Paris 5 区, spk 3 : 61 歳男性, enq. : 61 歳女性)

例(9)では、先行発話で提示された発話の指示対象 « quartier » の定義について、例(8)と同じく **si vous voulez** の後に « c'est » によって導入される rhème において、発話者 (spk 3) の視点による再定義が展開されている (7 行目: « c'est du quartier j'y vais à pied »)。また、**si vous voulez** の直前の **alors** は、主題となっている先行発話の内容を前提とし、そこから導かれる帰結を導入する役割を担っている。この要素から、発話者は先行発話の内容を発展させた次の発話 (= 発話者の視点による主題の再定義) が続けて展開されることを共発話者 (enq.) に示し、別の視点の存在を表明しながら共発話者を再定義された内容に注目させるよう導いていると考えられる。

(10) (アフリカ系の移民が多い地区では、家庭でフランス語を話さない園児が多いので、フランス人の園児と一緒にスクールバスで通園させることが語学習得のために有効なのではないかという提案に対し、それは難しいかもしれないと話している.)

enq. : c'est pour ça qu'j'parlais d'mélange

spk 2 : oui mais je pense que vous avez raison je pense que vous avez raison mais **si vous voulez** le mélange est difficile quand ils sont petits parce que + quand ils [sont petits + ben euh oui j'crois c'est pas tellement bon d'emmener un petit enfant d'trois quatre

- enq. : [quand il faut les emmener et qu’c’est pas facile **d’accord**]
- spk 2 : ans euh + **voyez** en + en bus un peu plus loin parce que déjà c’est quand même pour eux d’aller à l’école c’est pas évident hein +
(CFPP 2000, Paris 7 区, spk 2 : 70 歳女性, enq. : 61 歳女性)

例(10)で、発話者(spk 2)は« mélange »という主題についての共発話者(enq.)の意見は正しいという態度を明確に示しているが(2行目: « je pense que vous avez raison »), そのシークエンスの直前および *si vous voulez* の直前にある *mais* によって、発話者と共発話者との間で共有されている指示対象 (« mélange ») について、異なる意見が存在することを同時に示している。ここでは *si vous voulez* によって先行発話の内容に関する共発話者の視点の存在を認めながら、それとは別の視点で内容を展開していく意図が導入され、その視点による別の見解を受け入れるかどうかは共発話者に委ねるという態度が示されている。さらに共発話者(enq.)は、発話者(spk 2)の発言の途中でspk 2の発言内容を繰り返す発話を重ねており、その発話の最後は相手の意見に同意を示す表現 « *d’accord* »で閉じられている(4行目~7行目)。続けて発話者(spk 2)は « *voyez* »(8行目)という応答表現によって、共発話者が自分の見解を理解したことを確認している。これらの周辺要素から、標識 *si vous voulez* は共発話者と発話内容に関する理解の度合いの調整という主体間調整に関わっていることがわかる。

以上の例から、この位置での *si tu veux* / *si vous voulez* の表出の場合、発話者は指示対象についての先行発話の内容をまとめ、再定義した発話をこの標識によって導入し、共発話者に提示している。また、発話者の個人的な視点を表す(8) « *pour nous* », (9) « *j’y vais à pied* », (10) « *je pense que* », « *je crois* » といった周辺の表現からも、この標識には「他にも言い方があるかもしれないが、私にとって指示対象は~である」という複数の見解の存在を共発話者に示すと同時に、発話者に固有の定義を述部において提案する発話者の主張的な態度が含まれていることが読み取れる。

音声特徴としては、例(8)~(10)に共通して音調を示す(F0)、強度を示す(I)ともに高いレベルにあることから(F0+, I+), 発話者は *si vous voulez* の次

に展開する発話に焦点を当て、共発話者をその点に向かわせようとする意図が読み取れる (Fig. 2).

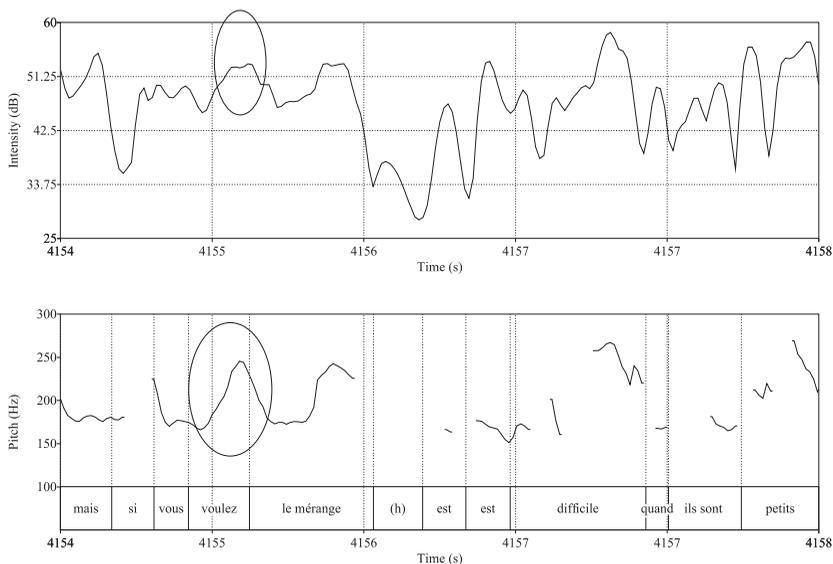


Fig.2-ex.(10) spk 2. F0 : 100–300 Hz I : 25–60 dB

3.2. 発話と発話の中間部 (パラグラフの途中) での表出

(11) (この地区で気に入っていることについて尋ねたところ、言語・文化・民族の多様な部分と、住民達がうちとけて生活していることを挙げ、それこそが街を豊かにしていると話している.)

enq. : c'est quoi la convivialité ? comment ça s'marque +

spk 2 : ben c'est les différences de culture +

enq. : non mais

spk 2 : apprendre si vous voulez euh la culture des autres {31} ça c'est très important + et pouvoir discuter avec les gens d'son immeuble

enq. : alors c'est ça

spk 2 : naturellement

(CFPP 2000, Montreuil, spk 2 : 58 歳男性, enq. : 61 歳女性)

例(11)では、発話者 (spk 2) が発話主題である « la convivialité » についての定義 (2行目: « c'est les différences de culture ») を一旦提示しているが、その後の発話で別の表現による「言い直し (travail de *reformulation*)」が連続して行われている (4行目: « apprendre la culture des autres », 5行目: « pouvoir discuter avec les gens d'son immeuble »). これは、発話者 (spk 2) が最初に提示した定義に対して、共発話者 (enq.) が不一致の態度 (3行目: « non mais ») を示したことから、発話者は再定義の必要があると判断し、共発話者の認知領域を想定しながら再び言い直しを試みるという一種の主体間での調整行為であると考えられる。また、この4行目の言い直しにおいては、動詞 « apprendre » と直接目的語 « la culture des autres » の間に標識 *si vous voulez* が表出しており、さらに目的語の前に躊躇の *euh* が観察されることから、発話者は共発話者の理解を得られるような適切な表現を探しながら再定義の過程にあることがわかる。さらに、5行目の言い直しでは先の言い直しより具体性を帯びた内容に発展しており、その結果共発話者は同意を示すに至っている (6行目: « alors c'est ça »). このように、一連の発話のターン交代によって発話者間で発話内容の理解の確認を行っていることから、*si vous voulez* が表出する発話では指示対象の認知に関わる主体間調整が行われていることがわかる。同時に、調整行為である言い直しという言語活動が繰り返される場合、標識 *si vous voulez* によって導入される指示対象の再定義は、発話者にとっては最終的なものではなく、あくまでも保留の定義であり、その後も発話主体間での調整状況によってさらに再定義が導入される可能性があることを示している。

(12) (パリ市内ではどの区の中学校・高校が良い/良くないなど、区によって学校の評判が分かれるという話題から、学校のレベルの差によって生じる問題点について話している.)

spk 2 : je pense que à l'intérieur de Paris globalement euh ++ les les écoles sont d'un bon niveau voilà + je pense moi j'vois euh dans l'vingtième j'ai des y a des enfants qui + qui visiblement + le lycée Voltaire est un bon lycée y a y a y a des bons établissements + y en a des moins bons + alors le problème *si vous voulez* qui se pose à Paris enfin que j'vois dans le vingtième c'est l'problème des écoles

maternelles et primaires dans lequel quand vous avez effectivement +
un certain nombre d'enfants qui ne sont pas + qui n' parlent pas
couramment français

(CFPP 2000, Paris 7 区, spk 2 : 70 歳女性)

例(12)では、関係代名詞 « qui » (5 行目) の先行詞である名詞 « le problème » (5 行目) と従属節 « qui se pose à Paris » の間に *si vous voulez* が位置している。このような先行詞と節の分断という現象や、先行発話における同じ語の繰り返し (1 行目 : les les, 3 行目 : qui qui, 4 行目 : ya ya) や、躊躇を表す euh, ポーズなどの音声現象から、発話者は発話主題についてどのように定義するか「組み立て中」であり、その定義はまだ完成していないが、現段階でのとりあえずの定義を *si vous voulez* によって導入していることがわかる。また、先行発話において個人的視点を導入する表現 « je pense que... » (1 行目), « je pense moi j'vois » (2 行目) が観察されることから、指示対象についての定義を組み立てる際に、共発話者の認知領域に合わせた表現を探しながら、同時に自らの定義があることを共発話者に示す意図があると考えられる。さらに、言い直しによる指示対象の再定義は、その後の発話においても継続して行われており、より具体的な情報が追加されている (5 行目 à Paris → 6 行目 dans le vingtième – 20 区), (5 行目 problème → 6 行目 ~ 7 行目 : problème des écoles maternelles et primaires dans lequel...). このことから、*si vous voulez* には発話主題の再定義を導入する機能があることがわかる。

- (13) (この学区は、他の学区と比べて教育者と保護者の連携がよく取れており、それは特に保護者の協力が大きいということを話している.)

enq. : mais + alors euh ++ le fait que ça soit des quartiers très privilégiés +
euh ++ jusqu'ou va cette solidarité + est-ce que euh + ça ça peut
s'étendre aux disparités d'fortune euh + parisiennes euh + ou + euh ++
est-ce que ça concerne *si vous voulez* le + le petit groupe des parents

spk 4 : je pense + très honnêtement (mh) en priorité le petit groupe des parents
c'est sûr + mais euh + pas uniquement moi j'ai essayé + vous savez je
j'avais une classe quand je suis arrivé ici + à mi-temps avec Madame E

(CFPP 2000, Paris 7 区, spk 4 : 60 歳女性, enq. : 61 歳女性)

例(13)においても、躊躇の *eah* とそれに続くポーズ、同じ語の繰り返しが多いことから、発話者(enq.)は共発話者(spok 4)への質問事項の中核である指示対象(=保護者の集まり)についてどのように表現すべきか、その言葉を探している過程にあり、共発話者と共有できるのではないかと想定した「*le petit groupe des parents*」(4行目)を暫定的に標識 *si vous voulez* によって導入している。実際、例(13)の先行発話(本稿掲載対話より前で展開されている発話)において、同じ指示対象(=保護者の集まり)を定義するために「*une petite communauté*」、*« les liens pour les parents »*、*« l'association des parents d'élèves »* など様々な言い直しが *si vous voulez* の前後で繰り返し行われている。このような「発話の指示対象の *dénomination* (命名)」という言語活動が標識の周辺で観察されていることから⁸、この標識には言い直しによる語の「再定義」の導入という機能があることを説明できる。さらにこの例では、この命名 *le petit groupe des parents* を共発話者(spok 4)が自分の発話で採用していることから(5行目)、発話の指示対象についての定義の共有という主体間調整が円滑に行われていることが読み取れる。

このタイプの表出例では、*si vous voulez* の周辺に同じ語や *eah* の繰り返しが多く観察されるが、これは発話者が発話を組み立てている途中(発話の実現過程)であることを示す言語活動「*travail de formulation*⁹」であり、発話者は自らの先行発話を再構築している過程で、共発話者の認知領域を想定しながら暫定的に決定した表現をこの標識によって導入し、共発話者に「とりあえずの」定義を提示している。つまり、発話者が自分にとって最適な定義にはまだいたらず、定義は保留状態にあることを示している。

音声特徴については、3.1.のタイプと同じく強度 I の上昇が観察された。また、標識の後に躊躇の *eah* が続く場合は強度 I がその高さを保っている。一方、3.1.と異なる点は、3.1.のタイプでは「*voulez*」の「-lez」の音節で特に

⁸ 本稿には掲載していないが、対話資料の他箇所においても *comment ça s'appelle, comment dirais-je*, など発話者が発話の指示対象について命名という言語活動の途中にあることを示す表現が標識 *si tu veux / si vous voulez* の周辺に多く観察された。

⁹ *travail de formulation* : Morel & Danon-Boileau (1998) からの引用 (Chapitre 6, p. 75-93 参照)。

音調 F0 の数値が上昇し (H 2.5), 続く発話の焦点化を示すのに対し, 3.2. のタイプでは標識 « si vous voulez » 全体にかけて 100~200 Hz という中レベル (H1~2) を示し, 続く躊躇の標識の音調も同じレベルを保っていることから, この標識の導入によって発話者は発言権を保持し, 自分にとって最適な定義を探しながら発話の再構築を行うという言語行為の過程にあることがわかる (Fig. 3, 4).

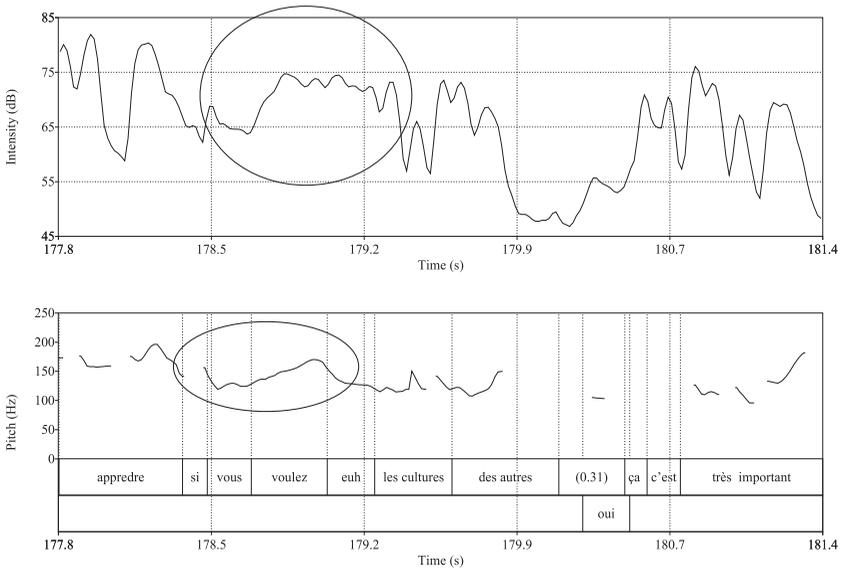


Fig.3-ex.(11) spk 2. F0 : 0-250 Hz I : 45-85 dB

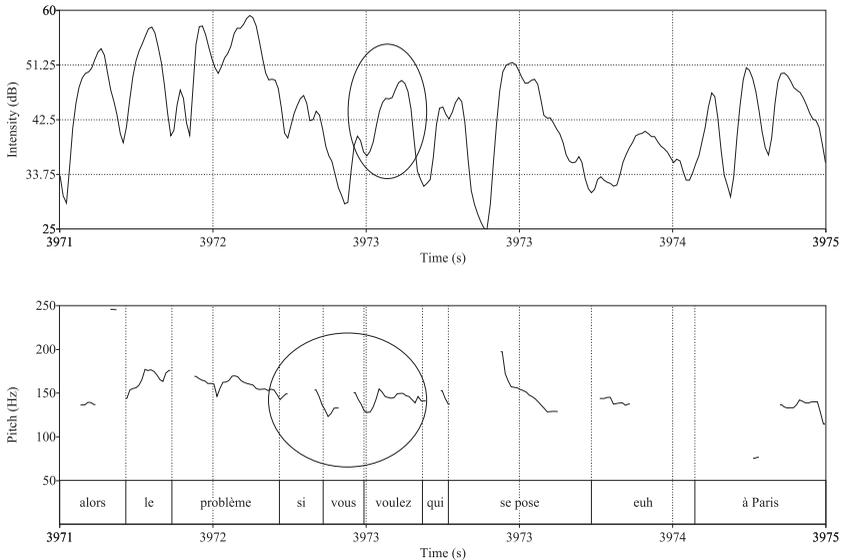


Fig.4-ex.(12) spk 2. F0 : 50–250 Hz I : 25–60 dB

3.3. 発話シークエンスの終結部での表出

(14) (enq. は spk 3 がバリ 18 区で仕事をしていることは知っているが、正確には 18 区のどのあたりか尋ねている)

enq. : euh + où travaillez vous alors exactement ?

spk 3 : dans le dix-huitième rue de Torci euh rue de Torcy c'est un + c'est un + euh entre la porte de la Chap- entre la porte de la Chapelle et le méto La Chapelle si vous voulez dans un dans un espace euh + assez assez déshérité euh +

(CFPP 2000, Paris 5 区, spk 3 : 男性, enq. : 61 歳女性)

例(14)で、発話者 (spk 3) はまず固有名詞 « rue de **Torcy** » (Torcy 通り) (2 行目) を挙げているが、通りの名前より一般的に認知度の高い地下鉄の駅の名前 (la porte de la Chapelle と La Chapelle) によって共発話者が場所を特定しやすいように別の表現で言い直している。また、その言い直しの過程において

« c'est un... » や前置詞 « entre... » の繰り返し, ポーズ, 躊躇の euh が観察されることから, 発話者は共発話者の認知範囲を想定しながら先行発話の表現に代わる別の言い方を探している途中であり, その結果として選んだ表現を *si vous voulez* によって再導入し, 相手に提案していることがわかる. さらに, 次の発話で « dans un, dans un espace déshérité » (4行目~5行目) と場所についての説明を続けているが, この不定冠詞 « un » の表出から2行目の rhème « c'est un... » を引き継ぐ発話と考えられる. これは, Torcy 通りの位置について共発話者に説明するため一旦中断された発話で, 標識 *si vous voulez* によって閉じられ, 次の発話シークエンスで再開していることを示している.

- (15) (spk 2 は長年出版社で紙媒体で原稿のチェックをしていたが, ここ数年はほぼ全てでコンピューターで原稿処理の作業をするようになったと話している.)

spk 2 : euh j'veux dire : ça euh + j'veux dire que + avant euh je je lisais les manuscrits j'faisais les modifications et j'les faisais intégrer euh électroni- enfin : (D 50) électroniquement [*si tu veux*

enq. : [oui oui d'accord

spk 2 : maintenant + mais d'ailleurs maintenant j'en suis arrivé à je ne lis quasiment plus sauf des manuscrits particulièrement retors où je lis euh : fais une lecture papier + sinon pour les autres travaille que sur écran +

(CFPP 2000, Paris 12 区, spk 2 : 61 歳男性, enq. : 男性 (年齢非公開))

例(15)では, 発話者 (spk 2) が « électroniquement » (3行目) という言葉を共発話者(enq.)に提案するまでの過程で, 言い直しの標識¹⁰である « j'veux dire » を躊躇の euh やポーズ, 言いよどみ (électroni-) とともに繰り返している. こ

¹⁰ 「言い直し *reformulation*」の標識は大きく以下の2つのタイプに分けられる:

- 1) *reformulation paraphrastique* : *c'est-à-dire, autrement dit, en d'autres termes, etc.*
- 2) *reformulation non paraphrastique* : *enfin* (renonciation), *en somme* (récapitulation), *en définitive* (réexamen), *au fond* (distanciation), etc.(Cf. Gülich & Kotschi (1983), Rossari (1994), Kara (2006)).

の « j'veux dire » は、発話者が指示対象についての再定義を展開する際に、自らの先行発話と比べてより適切な表現を選択し、共発話者に示そうという態度を示している。また、« électroniquement » という言葉を導入する直前の *enfin* も言い直しの標識であるが、これは先行発話における説明事項の列挙 (je lisais les manuscrits, j'faisais les modifications et j'les faisais intégrer...) の終了を示し、最終的な言い直しを導入して発話シークエンスを閉じる役割を担っている。

si tu veux の音声特徴についても、音調(F0)・強度(I)ともに下降を示すことから (F0-, I-), 発話シークエンスの終わりであることがわかる (Fig.5)。さらに、この下降特徴は共発話者による反応や介入を許可する合図であることから、発話者は « électroniquement » という表現を標識 *si tu veux* によって共発話者に提案し、その表現の意味を相手が理解しているか確認するためにこの段階で自らの発話を閉じ、共発話者に発言権を委ねているといえる。その結果、共発話者 (enq.) は発話者 (spk 2) による表現の提案の直後に、理解を示す応答 (4行目: « oui oui d'accord ») によって発話に参入している。

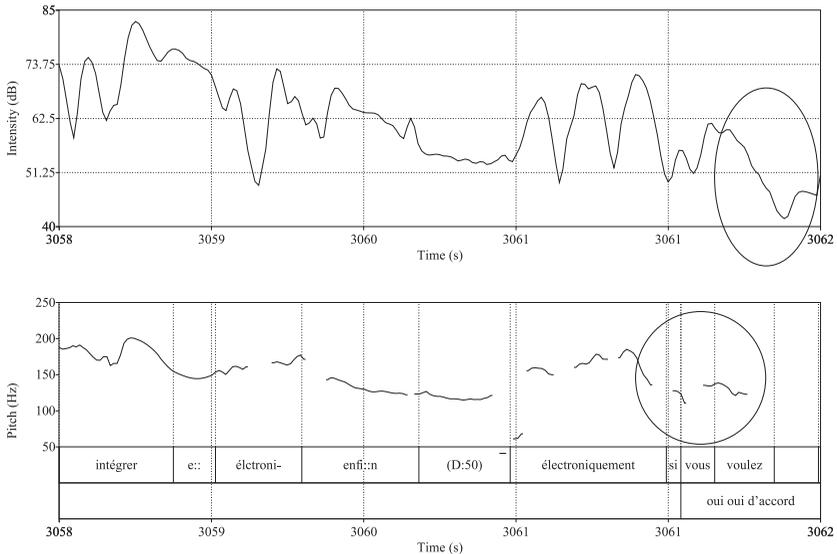


Fig.5-ex.(15) spk 2. F0 : 50-250 Hz I : 40-85 dB

- (16) (様々な変化に伴う街の物価の上昇に対する主婦の不満や、家庭の経済事情についての話題で、それは地区全般の生活に必ずしも関係しているわけではなく、個人の収入の問題に関わっていると説明している.)

spk 2 : ben si + non mais là c'est pas lié forcément à la vie d'un quartier {73} **si vous voulez** {70} c'est vi- c'est c'est lié d'abord au prix d'l'essence et c'est lié aussi aux revenus + de chacun des des alors effectivement X dans dans les quartiers + mais quand vous disiez + “la population a changé” ++ j'ai et c'est vrai qu'j'ai vu évoluer la population vers des gens quand même qui avaient plus de moyens +
(CFPP 2000, Montreuil, spk 2 : 58 歳男性)

例(16)では、「c'est」によって導入される rhème (1行目: « c'est pas lié forcément à la vie d'un quartier ») を閉じる段階で標識 **si vous voulez** が使われているが、続く発話でも「c'est」によってさらに先行発話の指示対象についての説明を再開し、内容についてもより具体的に展開している (2行目~3行目: c'est vi- c'est c'est lié d'abord au prix d'l'essence et c'est lié aussi aux revenus + de chacun). さらに、**si vous voulez** の直前と直後に観察された 70 cs のポーズや、「c'est」によって導入された rhème の繰り返しから、発話者は一旦共発話者に提案した見解について、共発話者が理解できるか確かではないと共発話者の視点から判断し、共発話者の反応をうかがいながらこの標識によってシークエンスを閉じた後に再び指示対象についての言い直しを行っていると考えられる (Fig. 6).

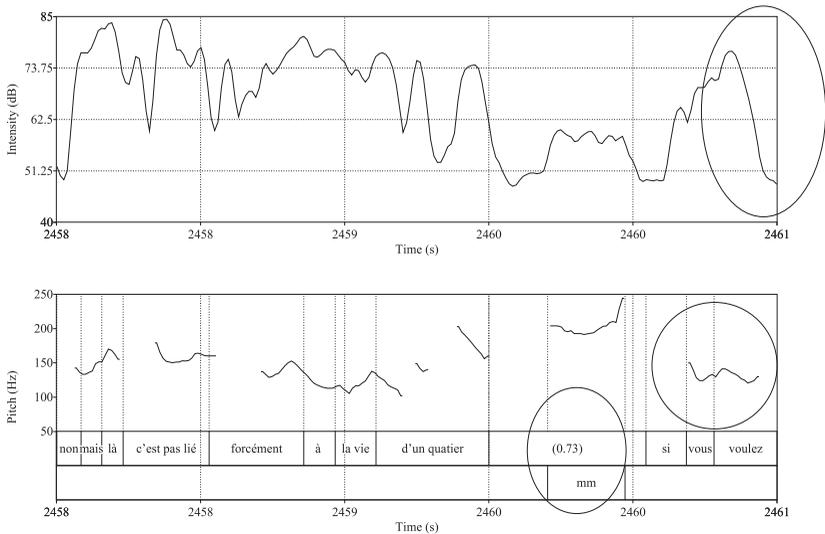


Fig.6-ex.(16) spk 2. F0 : 50–250 Hz I : 40–85 dB

この表出位置の場合は、特に音声面で第3節 3.1.(発話の開始部), 3.2.(発話と発話の間中部)のタイプと異なり、音調(F0)・強度(I)ともに下降を示すという特徴(F0-, I-)が観察された(Fig.5, 6)。先にも述べたが、これは発話シークエンスの終わりであることを示し、さらにこの下降特徴は、共発話者に発言権を譲る態度であり、共発話者に自分の提示した発話に対する反応を促し、発話への参入を許可する合図であることから、共発話者に先行発話の「言い直し」が適切に行われたか確認する発話者の意図が読み取れる。よって、共発話者が発話の内容や言い直しなどの進行についてきているか一旦確認してから、自らの発話の再構築を行うという発話主体間での調整行為がここでも観察される。

4. おわりに

本稿で扱った標識は、その構成要素(条件・仮定 *si*, 共発話者: 二人称主語代名詞 *tu / vous*, 意思を表す動詞 *vouloir*)から、形態的には共発話者の意向を考慮し、共発話者の認知に合わせた「言い直し *reformulation*」を提案する

という機能を対話において担っている。しかし、その「言い直し」という言語活動は、単に共発話者に合わせることを意図した譲歩的な言いかえではなく、また、先行発話を別の表現で言いかえるだけの行為でもない。

それは、発話の指示対象についての「概念」を、一方では共発話者の視点から、発話主体間で共有できると想定する適切な表現を探し、他方では発話者の個人的視点から「再定義 *réinterprétation*」して導入し、その再定義の表現や語の使い方を共発話者に提案する行為であるといえる (*processus de réinterprétation*)。つまり、この標識が使われる背景には、①発話者の立場、②共発話者の立場、③発話者間で共有できるかもしれないと発話者が想定する立場という複数の視点が同時に存在し、その条件の下で発話者はこの標識によって発話対象について共発話者と異なる「かもしれない」定義を提案することになる。それを共発話者が受け入れるかどうかの選択は共発話者の判断に委ねられており、こうして保留の状態にしておくことは、再定義についての相手の反応を促す行為につながる。この行為は発話者と共発話者の関係の調整でもあり、この調整行為の過程において、発話主体間には先行発話の再定義をめぐって対立（不一致）・提案・確認・譲歩・同意など複数の発話態度が相次いで生起しうる。この標識の表出には、このような複数の発話態度を一旦集約し、相手の反応によってさらに発話者主体間で調整が必要だと判断した場合には、次の段階の再定義を導入し、調整が完了するまで指示対象についての再定義を共発話者に提案するように発話者を導く機能があると考えられる。

Bibliographie

- APOTHÉLOZ, D. (2007). “Note sur l’activité de reformulation dans la conversation”, M. Kara (ed) *Usages et analyses de la reformulation*, Recherches linguistiques 29, Université Paul Verlaine – Metz, p.145–162.
- AUTHIER–REVUZ, J. (1995). *Ces mots qui ne vont pas de soi, Tome 1*, Paris, Larousse.
- AUTHIER–REVUZ, J. (1994). “L’énonciateur glosateur de ses mots : explication et interprétation”, *Langue française* 103, p.91–102.
- BRANCA–ROSOFF, S., FLEURY, S., LEFEUVRE, F., PIRES, M. (2012). *Discours sur la ville. Corpus de Français Parlé Parisien des années 2000 (CFPP 2000)*, <http://cfpp2000.univ-paris3.fr/CFPP2000.pdf>

- CHANET, C. (2001). “1700 occurrences la particule *quoi* en français parlé contemporain : approche de la « distribution » des fonctions en discours”, *Marges Linguistiques* No.2 (novembre), p.56–80.
- GAULMYN DE, M.M. (1987). “Reformulation et planification métadiscursive”, *Décrire la conversation*, J. Cosnier & C.Kerbrat–Orecchioni (eds), Presse Universitaire de Lyon, p.168–198.
- GÜLICH, E. & KOTSCHI, T. (1983). “Marqueurs de la reformulation paraphrastique”, *Cahiers de Linguistique française (CLF) 5, Connecteur pragmatique et structure de discours* (Actes de 2^{ème} colloque de pragmatique de Genève : 7–9 mars 1983), p.305–351.
- KARA, M. (2006). “Aspects polyphoniques des reformulations et des paraphrases pragmatiques”, L. Perrain (ed) *Le sens et ses voix. Dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Recherches linguistiques 28, Université Paul Verlaine – Metz, p.435–460.
- MOREL, M.–A & DANON–BOILEAU, L. (1998). *Grammaire de l’intonation. L’exemple du français oral*, Paris, Ophrys, Bibliothèque de Fais de Langues.
- NEVEU, F. (2003). “La glose et le système appositif ”, A. Steuchardt & A. Niklas–Salmien (eds), *Le Mot et sa glose*, Aix–en–Provence, p.143–167.
- NØLKE, H. (2006). “Pour une théorie linguistique de la polyphonie : Problèmes, avantages, perspectives ”, L. Perrain (ed) *Le sens et ses voix. Dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Recherches linguistiques 28, Université Paul Verlaine – Metz, p.243–269.
- ROSSARI, C. (1994). *Les opérations de reformulation*, Berne, Peter Lang.